

## 令和元（2019）年度 追手門学院中学校・高等学校 学校評価

### 1. めざす学校像

新教育の推進と成果を世界へ発信する拠点校としての位置付けを確立し、難関国公立大学や海外有名大学への進学を可能とする進学校

### 2. 中期的目標

1. 新教育の確立による唯一無二の進学校化
2. 海外大学への進学や海外での生活を可能とするグローバルマインドの形成と英語4技能育成プログラムの構築
3. 安定的な志願者の確保につながるブランド力の向上

- ①新教育の徹底と発信
- ②第一志望進路実現100%
- ③募集の安定
- ④安心安全な学校の構築
- ⑤働き方改革の推進

### 3. 自己評価アンケートの結果と分析・学校関係者評価委員会からの意見

自己評価アンケートの結果と分析【2019(令和元)年10月実施】	学校関係者評価委員会からの意見
<p>○生徒</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特に高3での進路指導の取り組みに対する評価が向上した。組織的かつ細やかな進路指導ができた結果であると考えられる。実際の大学への合格実績の向上も見られる。</li> <li>・生徒の満足度では、学びの部分で、特にアウトプットの項目に関する評価が向上した。新校舎を活用した新たな学びの取り組みが評価されていると考えられる。</li> <li>・新校舎の収納に関わる不満が出された。次年度への改善点として受け止めている。</li> <li>・今年度も、担任指導に対する評価は非常に高かった。生徒と担任が良好な関係性を築くことができていると考えられる。</li> </ul> <p>○保護者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・友達との関係性や安全面等についての評価が特に高い。</li> <li>・保護者においても、生徒と同様に、担任指導に対する評価は今年度も非常に高かった。学校に対する満足度も昨年度より向上した。</li> <li>・国際教育に対する評価を大きく上げることができなかった。まだ一部の生徒での取り組みが多く、生徒全体に浸透する取り組みになっていない面があるからだと考えられる。また、3つの学びのうちの個別の学びに対する不安がある方がおられるので、そのシステムについての理解を深め、さらに浸透させることが必要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な取り組みが進んでいることはよくわかる。</li> <li>・以前と比べると、学びの取り組みは進化しているように思う。一方で、特に中学での行事が少なくなって、保護者としては少し残念に思う。私立中学でしか経験できない取り組みを大切にしてほしい。</li> <li>・学校の新たな取り組みが、大学への合格実績として表れていることは結構なことだ。</li> <li>・学習習慣の評価が高くないのは、学校での自習の様子が保護者にはわからないのと、家に帰ってから子どもが学習している様子が見えないことが要因だろう。新しい自習のシステムの狙い等、もう少し保護者に丁寧に説明することが大事である。</li> <li>・学校視察にたくさんの方が来られたことを聞いた。地元の中学においても、追手門の教育への期待感が高まっていることが感じられる。</li> <li>・保護者としては、大学への合格実績も大事だが、人間的な成長も重視している。そういう点でも、担任の先生にはしっかりと指導してもらっているし、入学した時から見た子供の成長の度合いが大きく、ありがたいと思っている。</li> <li>・追手門学院大学への評価が高まり、例年以上に進学する生徒の数が増えていることはいいことだ。</li> <li>・先生方の仕事が大変なのはよく理解している。いろいろな声はあるかもしれないが、先生方が働きやすい条件整備は必要だろう。</li> <li>・ICT活用が先生方の余裕につながり、生徒に接する時間の確保につながればさらにいいことだ。</li> <li>・校舎内の収容スペースの工夫をお願いしたい。</li> <li>・個別の学びのさらなる工夫と放課後学習の再整理をお願いしたい。</li> </ul>

4. 本年度の取組み内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 新教育の徹底と発信	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新校舎の100%活用</li> <li>・3つの学び+リフレクションの徹底</li> <li>・授業公開などの充実と外部への発信</li> <li>・授業力の向上</li> <li>・保護者・生徒のマインドセット</li> </ul>	<p>(1) 教員が新教育の意義を理解し、新校舎をフル活用することで、3つの学び+リフレクションの徹底により学力向上につなげる。</p> <p>(2) 教科内で、また教科を越えての教員研修を行い、上記(1)が実現できるようにする。授業コーチによる指導と管理職との打ち合わせを強化する。</p> <p>(3) 新教育の展開とその教育の成果を学外に発信する。</p> <p>(4) 新校舎エントランスのディスプレイを活用した、学校の「今」の動きを生徒に対してタイムリーに伝える。学びや進学に対するモチベーションアップのために学年が一体となって指導に当たる。</p>	<p>(1) 授業アンケート、教員間授業見学によるフィードバック、模試等の過回比較等</p> <p>(2) 教員主導の研修会実施、その他上記(1)と同様</p> <p>(3) 学外からの教育視察件数、教育EXPO2019の実施とその動員数等</p> <p>(4) 学校評価アンケート、希望の進路実現</p>	<p>(1) WiFi環境が整い、ICTを活用した授業という面では、進歩を遂げた。特にアウトプットの機会が増えたことでその力をつけられたという生徒の評価が高かった。授業の狙いをさらに生徒に深く理解させることが課題である。卒業生の進学実績向上にもつながった。</p> <p>(2) 教員主導での各教科・ICT活用のレベル別での研修が数多く行われ、授業に活かされた。教科内・学年内に限られたものではなく、非常勤講師も巻き込んだ研修を持ち、教科コンピテンシーや評価基準の再確認につながった。授業コーチングは丁寧なフィードバックにより、若手教員の授業力向上を図ることができた。</p> <p>(3) 文科省関係者をはじめとして、50件以上の学外からの教育視察団を受け入れた。新しい校舎とそこで展開される教育内容についての質問に答えた。また、7月に教育EXPO2019というイベントを実施し、新教育の進捗状況を公開した。学外から200名近くの参加者があった。9月には未来の先生展において、新校舎の活用を通じた新教育について発表した。</p> <p>(4) 生徒の学びの様子やイベントでの活動、クラブ活動、生徒会活動の様子をタイムリーにエントランスのディスプレイにて、年間を通じて紹介できた。高3では特に生徒満足度が向上し、希望の進路実現につながった。</p>
2 第一志望進路実現100%	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新教育による生徒の成績向上</li> <li>・コース制やカリキュラムの抜本的な見直しによるブランド力の向上</li> <li>・Project型Original Programの開発</li> <li>・英語4技能授業の育成・実践</li> <li>・キャリア指導力の向上</li> <li>・中高一貫教育の強化</li> <li>・高大連携の再構築</li> <li>・難関を含む国公立大学60名、早慶上理MARCH関関同立200名、海外大学3名</li> </ul>	<p>(1) 新しい探究の時間の取り組みをスタートさせ、その中で進路探究プログラム開発と実践を進める。</p> <p>(2) 学外の教育関係者とのコラボにより、課題発見・解決型のProjectを共同開発、教員向けPBL研修も独自のプログラムを開発する。</p> <p>(3) 低学年時からの進路意識の醸成、模試分析から出願指導に至るまでの組織的な取り組み</p> <p>(4) 高大連携プログラムの再整理・再構築と海外大学との提携</p>	<p>(1) 授業アンケート、進路探究のプログラム開発・実践</p> <p>(2) 授業アンケート、プログラムの開発・実践</p> <p>(3) 大学合格実績、進学データの作成</p> <p>(4) 高大連携の具体的な内容の見直しと実践、海外大学との提携の実現</p>	<p>(1) 新たな探究の取り組みの中で、高1の進路探究のプログラムをスタートさせた。学外の力も借りることで、短期間のうちに独自プログラムを確立させる計画である。低学年時より、自らのキャリアについて意識をさせる取り組みができており、高3での進路プロジェクトにつながる。</p> <p>(2) 生徒向けの教育プログラムと、教員研修の実施、さらには教員研修プログラムの開発が進んでいる。Millennium Schoolとの関係性を発展させ、他校の教員も招く形での研修を本校で実施することができた。</p> <p>(3) 生徒が最後まであきらめない、という意識を持って入試に臨めた。生徒一人一人に対する組織的な指導が浸透し、国公立大学においても、今まで以上の成果をあげた。また、詳細にわたる入試データを作成できた。</p> <p>(4) 大学入学前教育の内容の見直しと整理を行った。合同学園祭をはじめとして、生徒と学生が共に学べる場の創造を進めている。カリフォルニアのMillennium Schoolとの教育連携協定にサインし、具体的なプランを立てている状況である。</p>
3 募集	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会的評価を上げるための広報活動</li> <li>・追小との連携強化</li> <li>・保護者満足度の向上</li> <li>・志願者数 中学210名、高校専願200名、併願1,100名</li> </ul>	<p>(1) 生徒募集広報の内容の洗練化と共に、中期的視点での教育広報の展開を図る。HPの活用法、投稿する記事の内容の工夫、入試説明会の内容の工夫などを行う。</p> <p>(2) 追手門学院小学校との定期的な情報交換を行い、本校教育の取り組み内容を周知し、入学につなげる。</p>	<p>(1) 学校案内作成、HPやFacebook、さらにはTwitterにおける定期的な記事投稿等</p> <p>(2) 情報交換会の開催、保護者対象説明会への参加、教科間での連携強化</p>	<p>(1) 生徒募集広報という観点からは、活動の内容が洗練されてきた。HP以外の媒体からの発信も増え、Facebookのフォロワーも年度末で700近くになった。教育広報という観点からすると、時間がかかる面もあるが、地道に活動を続ける必要があり、新たな媒体も考えている。</p> <p>(2) 入試広報部を中心に、小学校教員との情報交換会や、保護者説明会の打ち合わせを行った。残念ながら、本校受験につながることはなかったが、教育広報の観点からも、発信できる内容をまとめていく。教科間での連携をさらに深めたい。</p>

<p>の安定</p>		<p>(3) 内部広報の充実による、保護者満足度の向上</p> <p>(4) 中学・高校共に安定した数の入学者を迎えられるように、入試問題の工夫を行う。中学校や学外の教育関係団体とのつながりの継続的な強化</p>	<p>(3) HP上の投稿記事、学年グループ内での情報発信、SNS等での定期的な発信、学内メールでの連絡・情報共有等</p> <p>(4) 志願者数、入学者数、入学者のレベル等</p>	<p>(3) 学内メールでの連絡が徹底され、保護者からは評価をいただいている。内部広報においては、教育広報が中心となるので、定期的に、またタイムリーに情報発信することを心がけた。継続的に取り組み、中期的な視点で、さらなる満足度向上につなげたい。</p> <p>(4) 2020年度、中学は68名、高校は291名の入学者数であった。特に高校は、収容定員を上回る入学者を抱えてきたので、難易度調整が困難であった。</p>
<p>4 安心・安全な学校の構築</p>	<p>・教師力の底上げ ・教師自身の社会人力強化(マナー・教養) ・リスクマネジメント力の強化</p>	<p>(1) 各種会議での生徒情報の共有化、学年と管理職間での連絡・情報共有の体制の整備・強化</p> <p>(2) 各種教員研修の実施、主任・部長会議の活性化</p> <p>(3) 問題が起こる前のリスクマネジメント力強化を意識し、担任・学年・分掌・管理職の間の情報・指導方針の共有の体制整備・強化</p> <p>(4) 新校舎の設備面でのリスクの洗い出しと改善</p>	<p>(1) ICTの活用、学校評価アンケート等</p> <p>(2) 教員研修の開催、研修内容の実践</p> <p>(3) 問題行動・処分案件の件数、学校評価アンケート</p> <p>(4) リスク管理小委員会の開催、年度初め・年度途中・年度末のチェック、業者の点検</p>	<p>(1) ICTの活用が進み、生徒の様々な情報を効率よく共有できるようになった。学年を越えて情報共有できること、また管理職も情報に直接アクセスできるようになった。学校評価アンケートでは、生徒も保護者も満足度が高い項目であった。</p> <p>(2) 学外の講師を招き、リスク対応について学ぶ機会を設けられた。研修の後には、すぐに改善・実践に移すことを意識した。</p> <p>(3) 生徒・保護者の学校評価アンケートでは満足度が高かったが、問題が起こってから対応よりも起こる前の指導や準備の面で、さらに意識を高めねばならない。近隣地域との関係も意識し、さらに良好な関係を築いていく。</p> <p>(4) リスク管理小委員会において、リスク面をチェックし、心配される点はすぐに改善した。以後、定期的にチェックをし、安全管理に努めている。</p>
<p>5 働き方改革の推進</p>	<p>・働きやすい職場環境づくり ・業務スクラップのさらなる推進 ・情報の整理と共有化 ・校務のICT活用</p>	<p>(1) 業務時間外の学外の関係者との対応方法改善</p> <p>(2) ICT活用での校務の効率化と会議・情報共有の方法の見直し</p> <p>(3) 年間を通じた働き方を見直しと、それを考える組織の立ち上げ</p>	<p>(1) 勤務時間外の対応のルール化、学外関係者への理解の要請</p> <p>(2) ICT活用での会議削減、会議のペーパーレス化、会議時間の短縮、デジタルでの情報共有の方法の確立</p> <p>(3) 勤務時間把握の徹底、衛生委員会の定期的開催、組織の立ち上げ</p>	<p>(1) 18:30以降の緊急ではない学外からの電話への留守番電話対応を実施した。保護者との面談の時間もできるだけ勤務時間内での対応に協力要請をした。</p> <p>(2) 職員会議を月1回に。職員朝礼やその他会議でも原則ペーパーレス化、連絡事項もコンピュータを用いて行うようにした。オンライン会議にも対応できる準備をした。</p> <p>(3) 最終退勤時間の徹底、出退勤時間把握の徹底と衛生委員会の定期的開催を行った。働き方改革推進委員会を立ち上げ、継続的に改革を進められる体制を整備している。</p>